

はるだしゆく しょだいだいかん
原田宿の初代代官

小河内蔵允

福岡藩士の小河内蔵允之直は、天正3年（1575）9月19日に播磨国印南野（現兵庫県）で生まれました。父親は播磨国の地侍・英保常久、母親は黒田二十四騎の一人・小河信章の姉で、信章は之直の叔父にあたります。

この「英保松千世」は之直の幼名であり、ここから天正16年12月には之直が丹齋の許にあり、黒田家から知行地が与えられていたことがうかがえます。



晩年の小河内蔵允之直像

父・常久は、当時、織田信長の中国攻めの総大将として播磨国に進出してきていた羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）に敵対して討ち死にしたため、之直は母と共に叔父・信章の許に身を寄せました。その後、母が黒田二十四騎のひとりである桐山丹齋に再び嫁いだため、之直は叔母に養われましたが、その後、豊前国中津（現大分県中津市）へ赴き、母が嫁いだ丹齋を頼りました。黒田孝高（如水）が豊前国六郡の領主となり、中津城を居城としたのは天正16年ですので、之直が中津にやって来たのは、これ以降のことと考えられます。

桐山丹齋の伝記である「桐山家譜」（福岡市博物館蔵）によれば、丹齋は天正16年11月に黒田長政から豊前国上毛郡（現福岡県築上郡吉富町・上毛町、同豊前市の一部、大分県中津市の一部）内で965石の知行地を与えられますが、その詳細を記した同年12月3日付けの「知行分村付之事」には、上記に加え「英保松千世」分として83石を与える旨が記されています。



内蔵允の叔父・小河伝右衛門信章像

一方、叔父・小河信章は、豊前入国後に5,000石の知行地を与えられ、黒田家が中津城築城まで居城とした馬ヶ岳城（現福岡県京都郡犀川町）を預けられました。天正20年（文禄元年・1592）にはじまった朝鮮出兵（文禄の役）では黒田長政に従って渡海し、感上府（ソウル）開城後、朝鮮半島北西部の黄海道の経略を担当した長政の指示により龍泉城を守りました。翌文禄2年1月、小西行長が守る平壤城を明軍が急襲した際、龍泉城の守りを固め、撤退してきた小西勢を救出するという功績をあげました。これにより信章は豊臣秀吉から豊前国内で1万石の領地を与えられることになり帰国を命じられましたが、その途中、矢疵がもとで対馬において亡くなりました。

この時、信章には跡継ぎとなる男子がいなかったため、甥の之直が信章の長女と結婚して養子となり家督を継ぎました。知行地も信章と同じく5,000石を与えられ、馬ヶ岳城も預けられました。

慶長5年（1600）12月、黒田長政は、関ヶ原合戦の功績により筑前国ほぼ一国を与えられて名島城に入り、翌6年から新しい城郭と城下町の建設に取りかかりました。之直は、井上之房・栗山利安・母里友信・後藤基次・黒田一成とともに年寄（家老）に抜擢され、入国直後の領内経営の一端を担いました。中でも之直は、年貢収納や金銀の出納をはじめとする藩財政の運営全般を任せられ、長政の治世を助けました。

福岡藩では、慶長6年と同7年に検地が実施され、家臣団への知行地配分が行われました。之直には慶長6年3月に御笠郡内で8,000石の知行地が与えられました。その内訳を見ると、西小田村・若江村・原田村・萩原村・山口村・平等寺村・出古賀村・紫村・上古賀村・武蔵村・東原村・諸田村・恒松村・俗明院村（以上、現筑紫野市）、向佐野村・吉松村（以上、現太宰府市）、上大利村・筒井村・中村（以上、現大野城市）と、現在の筑紫野市を中心とする地域に知行地を与えられたことがわかります。

翌7年12月には2,000石が増され知行高1万石となりましたが、その際も原田村・筑紫村・萩原村・立明寺村・山口村・井手古賀村・上ノ古賀村・武蔵村・塔原村・杉塚村・吉松村・若江村・諸田村・常松村・平等寺村（以上、現筑紫野市）、大佐野村・迎佐野村（以上、現太宰府市）と、御笠郡内で現在の筑紫野市と太宰府市に知行地が与えられました。

このうち原田村には、江戸時代、福岡藩領内の主要街道である長崎街道（筑前六宿街道）が通り、筑前六宿のひとつに数えられる原田宿が設けられました。宿が開かれた年代は正確にはわかりませんが、寛永15年（1638）正月に島原・天草一揆鎮圧のために派遣されて来た、老中・松平信綱の軍勢が原田に宿泊しているの、これ以前には宿場が出来ていたと考えられています。

御笠郡山家村庄屋の山田家に残された、宿場における幕府役人や諸大名の休憩宿泊に関する取扱規定を記した「御通方御定目」の追録には、原田宿の初代代官として之直の名前が見え、知行主として宿場の開設に関与して

いたことをうかがわせます。

また、之直は知行地にある天拝山の麓に屋敷を構えました。天拝山は江戸時代以前、木は無くススキのみが生えている山でしたが、之直が植林したことにより木が生い茂るようになったと伝えられています。



小河内蔵允が植林した天拝山

元和9年（1623）8月4日、黒田長政が京都・報恩寺（京都市上京区）で亡くなります。この時、之直は長政のもとにあり、亡くなる2日前には栗山大膳利章とともに長政から遺言され、後事を託されました。

之直は、長政の跡を継いだ2代藩主・黒田忠之のもとでも藩財政運営全般を任されました。忠之は、藩主である自らに権力を集中させるため、黒田家を草創期から支えてきた譜代の家臣たちを次々に処分していきました。これが寛永9（1632）～10年の黒田騒動（栗山大膳が忠之に謀反の疑いありと幕府に訴え出る）を引き起こすことになるのですが、之直は幕府の裁定において大膳と対決するなど、家老として忠之を助けました。

武功よりも行政的手腕で黒田家を支えた之直は、寛永16年4月に亡くなり、聖福寺（福岡市博多区）に葬られました。

（高山英朗）

【参考文献】

『福岡県史』通史編福岡藩（一）（福岡県、1998年）、『筑紫野市史』下巻 近世・近現代（筑紫野市、1999年）、『同』資料編（下）近世（同、2000年）、『新修 福岡市史』資料編近世2（福岡市、2014年）、「小河家譜副本」（小河資料1-1、福岡市総合図書館寄託）など